

# Japan Singapore Architecture Forum 2016

## アジアにおける建築ビジネスのCross Collaborationを目指し、開催！



濱田明彦 (国際建築活動支援フォーラム (JSB) 評議員)

### ● オールジャパンの総合力で Cross Collaborationをアピール

3月18日、シンガポールの都市再開発庁 (URA) において、アジアにおける「Cross Collaboration」を目指したオールジャパンによる初めての建築フォーラムが開催された。

ASEAN経済共同体の成立に見られるように、アジア諸国とはこれまで以上にさまざまな分野で交流が進むと期待され、とりわけ建築マーケットにおける快適な生活空間・都市開発・環境保全・災害対応等に関する技術交流が、喫緊の課題となっている。

そうした中で、建築に携わる建築家・施工会社・建築資材メーカーを含めた建築・建設業界全体の知見・デザイン力・技術力をもって、日本の総合力をアジアにアピールし、共に相手国のデベロッパーや建築家と「Cross Collaboration」しながらアジアにいかにも貢献できるのかを議論し、特に日本・シンガポールがその特徴を生かして連携しながら、ASEANの建築ビジネスを促進して皆win-win-winで発展させていこうというのが、このフォーラムの主旨である。

### ● URA・日本の両国政府・民間からの 全面的なバックアップ

ヨーロッパ諸国連合に匹敵した経済圏として発展すると見込まれるASEANの中で、やはりシンガポールは情報のハブであり、日系・東アジア系はじめほとんどのデベロッパーも出店し、シンガポールを拠点にASEAN・インド・東アジアへの都市インフラ・都市開発・プロジェクト開発等を加速しようとしている。そこで今回のフォーラムは心臓部であるシンガポールでの開催とした。

国土交通省の後援のもと、在シンガポール日本大使館 (福嶋教郷一等書記官) およびジャパングリエイティブセンター (JCC、伊藤実佐子参事官) にも、当フォーラムの開催主旨について全面的にご理解とご協力をいただき、さらにシンガポール都市開発庁 (URA)・シンガポール建築家協会からも賛同をいただき後援名義も取得した。さらに日本大使館・JCCの推薦により、シンガポール・日本国交樹立50周年認定事業としての認可もいただき、さらにシンガポール情報文化省機関シンガポールデザインカウンシルの主催するデザインウィークでの事業としても認可された。

当イベントの主催は、日本建築家協会・国際建築活動支援フォーラム (JSB)・デルファイ研究所の3機関で、さらに日本建築学会・日本建築士会連合会・日本建築士事務所協会連合会・



小倉理事長オープニングスピーチ

日本建設業連合会からも後援をいただくなど、両国の官民支援による一大イベントとなった。国交省からはゲストスピーカーとしても参加いただき、当フォーラムの主旨に沿った講演もしていただいた。

### ● ところでJSBとは？

そもそも(一財)国際建築活動支援フォーラム (JSB) は、2011年に開催された国際建築家連合 (UIA) 東京大会の追加事業として、2012年2月に日本の次世代建築界発展に向けた国際的人脈育成に関する事業を行うために設立され、海外での修士号獲得プログラムや海外自主活動企画への支援、また欧米やアジアで働いてきた建築家を交えて経験談を語り、これから海外で活躍する建築家をインスパイアするパネルディスカッション「@round」も複数回開催している。今回は「海外で活躍しよう」という主旨をさらに発展させて、いっそのこと「海外で日本の建築界自体の力を直接アピールしよう」という発想から、このフォーラムを企画した。

JSBは、UIA東京大会でのオーガナイザーである建築五会の共同事業であり (当理事も五会の各会長が兼務)、その特徴を生かし建築家のみならず建設業界全体を含めたオールジャパンでの参画により、わが国の幅の広い包括的な知見と技術をアピールできると考えた。

### ● フォーラムでのディスカッション

常時200名近くの聴衆を前に、豊田啓介 / NOIZ / architecture.design&planning、吉村靖孝 / 吉村靖孝建築設計事務所、小林博人 / 小林・楨デザインワークショップ・慶應大学大学院教授、迫慶一郎 / SAKO建築設計公社、Chang Yong Ter / Chang Architects、宮川浩 / 日建設計、前田康貴 / 大成建設、山口広嗣 / 竹中工務店の各分野の建築家達が、当フォーラムのテーマ「Cross Collaboration」に従って、国内外でのプロジェクトのデザインや技術貢献を各自30分間プレゼンテーションし、そうした知見をもとにシンガポールのデベロッパーや建築家といかにコラボレーションしながら、いかにアセアンに貢献できるのかを、熱く語ってもらった。

まず小林博人氏からは東日本大震災での経験をもとに、住民がベニアを使ったシステム部材を組立てて自ら集会



フォーラム会場



プレゼンテーション

所を作る「ベニアハウス」を紹介、また被災地だけではなくミャンマー・フィリピン・コンゴといった国々でNPOの協力を得ながら、住民と一緒に製作できる学校・集会所の製作を紹介するプレゼンテーションがあった。

宮川 浩氏からは、おりしも昨年秋にシンガポールで開催されたレールコリドー国際設計コンペで、最優秀に特定された案を披露。これはシンガポールを南北に貫く総距離24kmの旧マレー鉄道跡地を、コミュニティのためのパブリックスペースとして再生するマスタープランコンペで、世界から集められた64案の中から優勝当選した事例。日本での社内専門家の知見だけではなく地元シンガポールのランドスケープアーキテクト・建築家等とコラボレーションしながら生まれたアイデアで、まさに当フォーラムの主旨にかなった実績の紹介があった。

Chang Yong Ter氏からのシンガポールでの風の道・緑・環境を踏まえたパッシブな住宅やホテルの紹介、豊田啓介氏のデジタルなデザインを駆使した台湾他でのプロジェクト紹介、山口広嗣氏からのシンガポールでの設計施工の事例として世界的な最先端施工技術で実現可能となった公共施設再生プロジェクトの概要の紹介、前田康貴氏は幅広く国際的な施工経験を、そして吉村靖孝氏・迫慶一郎氏達の海外における活躍やプロジェクトでの知見等を含めて、日本の総合的なデザイン・建設技術を一望できるプレゼンテーションとなった。

ゲストスピーカーとして登壇した白木雄志氏／国交省建築産業局国際課、シンガポール南洋理工大学客員研究員からは「シンガポール・日本の政府・民間企業の連携による都市インフラストラクチャー分野での国際展開の推進」と題して、都市密度・高効率な土地利用・TOD・環境省エネルギー技術・高度な施工技術等により、両国の官民が連携しながらASEANのインフラストラクチャー分野での更なる貢献が期待される、といった講演をいただいた。

プレゼンテーションの後は、建築家8名とモデレーターの内宮智久氏(シンガポール国立大学講師)を中心にパネル形式の議論が行われ、海外案件でのコラボレーションの難しさや重要なポイントについてディスカッションがあった。海外では相手先のモチベーションを知りゴールを共有すること、現地の文化や宗教、生活習慣を理解し尊重しながらプロジェクトを遂行させること、さらにRespect(尊敬)・Involvement(巻き込む)・Engagement(かみ合っている)が大事であること、そしてこれらを背景に十分踏み込んだ議論の末に初めてボーダーラインを越えることができること、単なるコラボレーションでの契約や業務スコープの範囲でのプロジェ

クト遂行ではなく、言わばお互いに契約等を超えて踏み込んだ姿勢が必要で、その時に初めて「Cross Collaboration」としてプロジェクトを共有できるのではないかと、との意見が印象的だった。場内の米国籍の建築家やURAの方たちからの質問として、「Cross Collaboration」は日星

(日本・シンガポール)両国やアセアンにとって大歓迎であるが、かたや日本国内で海外建築家を受け入れている事例は実質的にあるのか、さらに日本の建築情報を調べようにも英語表記がほとんどなく未だ世界に閉ざされているのではないかと、といったプリミティブな質問もあり、こうした誤解を解きながら議論も盛り上がった。フォーラム終了後は、福嶋一等書記官のご挨拶を交えたネットワーキングセッションとしてのパーティーがにぎやかに開催された。

このフォーラムの前後に3週間にわたってURAの1階City Galleryで開催された当フォーラムの展示会Design and Technology of Japanese Architectureでは、フォーラムで発表する建築家達の作品展示だけではなく、建築五会の昨年の各賞作品、日建設計のシンガポールコンペ当選案、大林組・竹中工務店・大成建設の施工関連技術展示と同時にAGC旭硝子の最新製製品も出展し、日本の高度な技術を披露した。

## ●さらなるCross Collaboration

フォーラムの総括として、「Cross Collaboration」をテーマに日本の建築界の知見・デザイン・技術力・組織力を駆使してシンガポールに留まらず、ASEAN諸国他の建築・都市開発に貢献していこうとするフォーラムを開催できたこと、それがシンガポールのURAおよびシンガポールのメディアで高く評価いただいたことが挙げられる。同時にアトリエ・大手設計事務所・施工会社が目的を同じくしながら一堂に会し、こうしたフォーラムをすべて英語でディスカッションしアピールしたことは、日本の建築界の新しい幕開けとして大事な一歩を踏み出したと考えることができる。

当フォーラムの評価として、URAからは「地元の建築家を参加させたことでコラボレーションの意義があった」、および次回他ASEAN諸国でのフォーラム継続の支援をいただき、また大使館からは「若手を中心に非常に熱のこもった発表で、質疑応答も盛り上がり興味深い内容であった」との評価をいただいた。一方、難を言えば、地元の建築家を多くインボルブさせることができれば、さらに大きな議論が得られたのではないかと等の意見もいただいた。これら反省点も踏まえて、次回のこのフォーラムは継続的に他のASEAN諸国に移しながら、相手国の建築家やデベロッパーもプレゼンテーション・パネルディスカッションに登壇してもらう予定であり、また国交省からの更なる支援も期待できる状況となったことから、今後は官民一体オールジャパンのフォーラムとして本格的に発展させていきたい。

フォーラム終了後の3月29日にJIA建築家クラブで、出展関係者に加え、国交省・建築五会・メディアから30数名に集まっていた当フォーラムの報告会を開いた。芦原太郎JIA会長からはこのフォーラムの主旨の重要性を説くと同時に、建築五会と共に2018年アルカシア大会の日本誘致を検討しており、今後もアジアとの関係性を強めていく旨の説明があった。

(はまだ あきひこ／日建ハウジングシステム社長)



パネルディスカッション